

藤並の森

Vol.17

(東京大学助教授・比較文学・比較文化)

●「絵金祭りの夜」(写真提供／三宮健秀)



リレー随筆⑯ 高知とパリを結ぶ縁 —蘇る岩村透— 今橋 映子

明治期において西洋画家たちには、作品を公表する展覧会や美術館、作品を買つてくれる画廊、新しい情報を作れる雑誌、友人たちと語り合うカフェなど、必要な制度や社会が、ほとんど存在しなかつた。裸婦像など、

この春、高知文学館主催の「パリ憧憬」展監修のため、生まれて初めて土佐の地を踏んだ私は、早春でまだ寒さが残るとはいえ、明るく開けた土地の雰囲気がすっかり気に入つてしまつた。「パリ憧憬」というテーマで仕事を度々受けた御質問は、「高知とパリ、全く関係が無さそうですが…?」というものだつた。そこで、まず自分が、美術評論家・岩村透と、深い縁のある所だからである。今回この企画、

岩村透（一八七〇—一九一七）は明治、大正期に活躍した美術評論家でありながら、岩村家は代々、旧土佐藩士、現在の宿毛市の出身である。透自身は東京小石川の生れであるが、伯父が自由民権運動にも一時関わったのである。岩村透は東京で教師を執つた。彼は、小倉に赴任した森鷗外に代わって、美術史やフランス語を担当し始めたのである。

岩村透は他に、黒田清輝、久米桂一郎、和田田科英作などの先生たちがおり、三十歳前田科英作などの先生たちがおり、三十歳前後にこうした若いスタッフたちは、日本に「洋画」という新しい芸術ジャンルを根付かせるべく、精力的に活動を展開していく。中でも岩村透はことに岩村透はこの春、高知のこの展覧会で、岩村透が故郷を眺める眼は優しく、美術史の分野でさえ、長年忘却されたのは、本当に嬉しい限りであった。しかしも持病の糖尿病が悪化し、四十九歳の若さで亡くなることとなつた。岩村透は、偶然にも高知のこの展覧会で、関連資料を史実上初めて、宿毛に「帰つた」折のエッセイの中で、岩村透が故郷を眺める眼は優しく、美術史の分野でさえ、長年忘却されたのは、本当に嬉しい限りであった。岩村透は、自分自身もまた、パリを経て高のそ

年代の日本では思いも及ばないが、反骨精神旺盛な人物だったらしい。岩村透は、またたく間に美校の名物教授となり、彼は多方面にわたって、土佐にゆかりの人らしく、岩村透はこの春、高知のこの展覧会で、岩村透が故郷を眺める眼は優しく、美術史の分野でさえ、長年忘却されたのは、本当に嬉しい限りであった。岩村透は、自分自身もまた、パリを経て高のそ

描く対象さえ規制に阻まれる状況ではある。岩村透は、自分自身の才能には早くから見切りをつけ、批評家に転じたが、しかし、「絵を描かぬ画家」の魂をもつて、洋画界に必要なものは何かを論じ続けていた。

一九〇二年に刊行された岩村透の著書には、「自らのパリ体験を含めながらなぜパリが『美術家』に語つた本である。実は私自身の調査によつて、岩村のこの著書には、英語の語つては必須の場所なのかを熱く語つた本である。岩村透は、單なる借り物の本ではない。彼は美術の都パリの魅力や画学生生活について語つたことが判明した（拙著『異都憧憬』）。日本人のパリ（平凡社ライブラリー）」。

しかし岩村のこのベストセラーは、單なる借り物の本ではない。彼は美術の都パリの魅力や画学生生活について語つたことが判明した（拙著『異都憧憬』）。日本人のパリ（平凡社ライブラリー）」。

岩村透は、自分自身の才能には早くから見切りをつけ、批評家に転じたが、しかし、「絵を描かぬ画家」の魂をもつて、洋画界に必要なものは何かを論じ続けていた。

2002年9月12日(木)～2002年10月14日(月・祝)

◆次回企画展によせて◆

「田岡典夫 没後二十年展」

—シバテンを愛し土佐を愛した直木賞作家—

「私も文学の山を喘ぎあえぎ登っているのです。それですからあとから来る人にも厳しく叱りつけるかも知れません。けれども、それは間違っていないと信じています。いくら達者な人でも、また、高名な人でも頂きを見ずに入っている人が多くあります。でも私は、その頂きをにらみつけながら歩いているつもりです。ですから、道が違っていると思えば人に悪口を云う資格があると思っています。もし、その頂きがほんとうの頂きでなく幻影か蜃気楼だったら、それは私の悲劇です。」

(一九五一年十二月一日付 杉村瑞子宛 田岡典夫書簡より)



田岡 典夫 (1908~1982)

は「オール讀物」「講談俱楽部」

たしかに田岡は深い。ふと、彼が菊池寛を、谷崎潤一郎を、志賀直哉を、そして広津和郎をも、へだてなく尊敬し、親交したことが想起される。

一九八二年（昭和五十七）、高知県初の直木賞作家田岡典夫が亡くなつて早二十年を過ぎた。『小説武辺土佐物語』『腹』を立てた武士たち『小説野中兼山』ほか多くの土佐もの時代小説を、彼ならでは

の透徹した歴史観・人間観で描き、多くの読者を魅了したものだ。

記録によると、ある時、故依光亦義氏は「田岡典夫氏が直木賞を授賞されたことはまちがいだつ」と述懐している。

この言葉の意味

部」といった大衆文芸雑誌をその主な発表誌とし、人気時代小説「権九郎旅日記」なども連載した大衆作家（この定義がまた難しいが）でもあった。だが、大衆に迎合した、いわゆる通俗小説作家ではなかつた。

後年、彼は「アルメイダの手記」という作品を「堅すぎる」という理由から長年付き合いのあった「オール讀物」でオクラ入りにされる。※（その後「かけろうの館」として新潮社から刊行される



1978~9年 平凡社刊
野中兼山 (1615~1663) とその時代を描いて毎日出版文化賞



田岡典夫自筆墨画
「土州しばてん真圖」
金澤典子氏蔵

猪（寺田寅彦の友人）が上海で客死し、伯父田岡典章・寿子夫妻の実子として届けられ裕福な環境で成長する。

その父典章も五歳で亡くなるが、賢母寿子の手で愛情深く育てられる。祖父や

が）そして「何を渡しても文句なく受け取られるようなエライ作家にならねば万事ダメだ」と脣を噛みしめている。勉強家であった彼は、土佐の歴史史料のほか『嬉遊笑覧』や『常山紀談』など、見られるだけの史料や隨筆を自分で読み確かめた。江戸や東海道や土佐の自然景勝・地理・歴史・経済・文化・風俗・言葉・そして時代の雰囲気といったものまでよく研究しており、その時代考証の確かさには定評があった。

自然よりも人事に関心を持ち、人間の

處世、有り様を、そして人間の心理の真実を、巨視的に且つ微細に、冷静な觀察眼で生き生きと描いた。また歴史の表舞

台に生きたヒーローよりは、歴史の片隅に置き忘れた、地味な人物に心を寄せ、血あり肉ある人間として蘇らせた。

さて、一九〇八年の「明治生まれ」の

田岡典夫だが、むしろ「大正育ち」と言

われることを本人は好んだ。実父田岡増

三（寺田寅彦の友人）が上海で客死し、

伯父田岡典章・寿子夫妻の実子として届

けられ裕福な環境で成長する。



田岡典夫著『姫』1958年刊

叔父たち（木村久寿弥太や田岡嶺雲）の蔵書もぐるりにあつた。第一次大戦後、活況を呈した青少年向け雑誌（『冒険世界』や『新青年』）なども欲しくは読みたいだけ購読できた。田岡典夫の文学的素地は、幼少期の恵まれた家庭環境の中で育まれたといつてもいいだろう。

だが、一九二三年（大正十二）母寿子を亡くしてからは心荒んだ日々もあつた。翌二四年七月、教師殴打事件で城東中学（現・追手前高校）を退学後は混沌とした日々をおく。一九三〇年、叔父木村久寿弥太の命令でパリに遊学。

パリの地下鉄を自由に乗り、ベルリックの語学校に通い、オペラや映画や美術を鑑賞し、モンマントルや郊外の公園に遊んだ。ライカで写真も撮った。フランス人ととも交友、当時の日本では考えられない自由な日々を過ごす。自ら選んだシベリヤ鉄道での旅であつた。モスクワでは、「日露戦争と日本」を回顧、帰路凍てついたバイカル湖上に月を見る。

その後の中南米やヨーロッパの旅、中國の旅での見聞から多くのことを学び、吸収し、人間としての幅を更に広めてくる典夫だが、二十一歳の「パリ遊

行」には、作家として人間としての田岡典夫の大きさ、優しさが滲んでいる。私は、「瑞子さんとの交流から、イメージを得て、出来た作品だ。田岡は、この作品を衣食のためではなく、書きたいから書いたのであった。瑞子さんあての手紙の一九五八年刊の『姫』（『土佐日記』逸文）は、瑞子さんとの交流から、イメージを得て、出来た作品だ。田岡は、この作品を聴く会などを計画中です。ボスター・チラシもご参照下さいませ。

（別役佳代）

＜主な展示資料＞

- ・典夫自筆墨画「土州しばてん真図」・「淑子夏粧之図」のほか 典夫油彩板画数点
- ・典夫書簡（杉村瑞子宛て・ほか）
- ・大原富枝、菊池寛、司馬遼太郎ほか
- ・典夫宛ての作家書簡
- ・典夫著作（『武辺土佐物語』『南海水滸伝』）や発表雑誌「講談俱楽部」など。
- ・『小説野中兼山』自筆草稿や資料メモ

＜関連企画＞

◆田岡典夫を偲ぶ記念講演会

10/5（土）14:00～16:00

講師：船曳由美氏（『小説野中兼山』担当編集記者）ほか
定員100名。当日先着順。

於：文学館ホール

◆田岡作品を聴く朗読の会

9/21（土）13:30～

◆「田岡典夫展」解説

毎日曜日の13:30～

◆「田岡典夫の肉声を聴く会」等計画中

「学」体験はその前哨として典夫のリベラルな精神の形成に大きな意義があった。

その後も、中南米やヨーロッパ、中国へと世界を旅して、その翌年（一九三二）六代目菊五郎主宰の俳優学校に入学。その頃から文章修業は始めていたようだ。三十六年、田中貢太郎との出会いから、文学の道を本格的に志すようになる。

四十一年、雑誌「博浪沙」に載った「しばてん櫻文書」が菊池寛に認められ文壇デビュー、四十二年下半期の直木賞受賞となる。

七十三年の生涯の中で彼は多くの人々と交友があつたが、昭和二十五年から最晩年まで文通し心を通わせた杉村瑞子（のち山村瑞子）さんの存在も大きい。

家田岡典夫、芸術を愛し、自然を愛し、人間を愛した、二十世紀の自由人、田岡典夫を、余る想いの幾分かでも、ご紹介できればとねがっています。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

なお、期間中「田岡典夫の肉声を聴く会」などを計画中です。ボスター・チラシもご参照下さいませ。

だが、敢えて「田岡典夫展」に取り組みます。今回初公開の資料も準備中です。作家田岡典夫を信頼し、交流し、支え、その人生の遺産、文学遺産を今日まで守り保管された方々の尽力に負うところが大です。

文学者として誇り高く生きた作家田岡典夫、芸術を愛し、自然を愛し、人間を愛した、二十世紀の自由人、田岡典夫を、余る想いの幾分かでも、ご紹介できればとねがっています。皆様のご来場を心よりお待ちしております。



1951.8.30 旭軒にて杉村瑞子さんと

学芸員メモ

「棟方志功展」から～土佐の棟方志功～



山崎登貴氏に贈られた棟方の色紙



「登貴観音」

棟方志功は、生前数回土佐に来ている。はじめて来高したのは、昭和30年7月に、展覧会のため。そのほか昭和47年4月に、「南海道棟方版画」制作のスケッチ旅行のためや、日本民芸の旅行で来高している。

昭和30年に棟方が高知に来るきっかけは、前・高知県立歴史民俗資料館館長の吉村淑甫氏と、保田與重郎の関わりによる。吉村氏は、保田與重郎を中心として発行していた雑誌「コギト」「祖国」に、同人として参加していた。そして、棟方と保田は戦前から交流があったのであ

長く病床にあつた吉村氏を励ます意味で、保田が棟方の展覧会を高知で開催することを提案し、吉村氏がそれをうけて高知市議会議事堂にて「棟方志功展」を開くことになった。板画・倭画・陶画の頒布会であった。

高知に出発する直前に、棟方はサンパウロの国際ビエンナーレ展の版画部門で一等賞を受賞する。7月2日に棟方が吉村氏に送った電報が残っている。「ミナサンノハクシユラキク カンシヤ 六ヒヨルウノユキニテタツムナカタ」。祝電の返事と思われるが、この日棟方は土佐からの拍手を聞いたのだろう。

その時の展覧会の会期は7月8日から11日。棟方は毎日会場に足を運ぶ一方で、城西中学校で板画の講習会を開いたり、土佐の楓絵師のもとをおとずれと一緒に楓絵を描いたり、桂浜、高知城から、かねてから行きたいと言っていた大杉などを見に行ったりしている。ハードなスケジュールであつたと思われるが、その中で様々な土佐の人々とのふれあいがあつた。なかでも、宿泊していた旅館「登貴」の女将、山崎登貴氏とは、後年

まで続く親交が生まれた。棟方から登貴氏に贈られた作品の中で、ひときわ目をひくのは、昭和30年7月11日、高知を去る前日に描かれた「登貴観音」という大きな倭画作品である。この作品のモデルは言うまでもなく登貴氏である。登貴氏は、棟方が理想とする、ふくよかな丸顔の女性であったという。

棟方が高知を去った直後に手がけたのが、谷崎潤一郎「鍵」の挿絵の板画であった。鍵のモデルとなつたが登貴氏ではないかという噂が流れたこともある。

昭和47年に来高した時に、棟方と登貴氏は偶然再会した。再会後、棟方から登貴氏に送られた手紙の引用が、小高根二郎著「歓喜する棟方志功」にある。昭和47年5月4日の手紙は、「前よりも、もっとキレイで、可愛い、わたくしの好んでいるタイプの、あなたさま、登貴さまを見てうれしくよろこび、体中が熱くなつて、握ったお手を離したくなかったのでした。そのお手をわたくしの身体中に、すりつけてすり付けて離したくなかつたのでした。前

の高知での「登貴」での時が、むしように湧いて来て、身体も、何もかも熱くなりました」。さらに、「この間ホテルの広間でお会いしてから想いつづけてあなたのさまが離れません。

昔より一寸お太りになつて、とてもとても、わたくしの板画

旅館「登貴」の庭を描く棟方
(撮影 池田栄功氏・写真提供 高知新聞社)

や、絵の様になつてうれしいうれしい事です」と、棟方らしい熱烈な表現となっている。

興味深いのは、同年8月19日の手紙である。「青森にかいつたのは、(ふるさとです)今、大きい仕事をしていまして、その仕事に合わせての姿体をとるのを、青森の夏のまつりネブタを見るに行ってきました。ネブタはとてもよかったです

が、板画の初源になる姿体はなかつたのが残念でした。けれどもこれも、仕方ありませんが、また自分のこころの中にある、登貴さまを――想うて板画いたしました

く思っています」。この大きい仕事といふのは、「加寿良穂の柵」という作品のこととで、故郷のネブタ祭にそのモデルを探しに行つたが結局見つからず、記憶の中

にある登貴氏の姿を思い浮かべて作品を作っているのである。さらに、棟方は登貴氏にモデルにするための写真を送つて欲しいと頼んだものの、それは実現しなかつたという。

登貴氏はあきらかに棟方作品に影響を与えた女性といえる。二人の交流は棟方が亡くなるまで続いた。(野中佐知子)

閲覧室から



『寺田寅彦の風土』

山田一郎著

第二十一回寺田寅彦記念賞(特別功労賞)受賞

/二〇〇一年十月六日発行/高知市民図書館

寅彦を生涯の師と仰ぎ、彼から多くの影響を受けた物理学者中谷宇吉郎の絵画は、宇吉郎の次女中谷不二子氏や中谷宇吉郎雪の科学館のみな様にご協力いただき、当地ではじめて紹介することができた。初日より熱心なファンが会場をおとず

『寺田寅彦覚書』『敷柑子集』の研究に続く『寺田寅彦の風土』は、ブーメランのような三部構成となっている。

第一部「寺田寅彦の風土」では寅彦の著作や書簡などから風土とのかかわりを紹いでゆき、第二部「寅彦紀聞」では寅彦と著者のエピソードを縦糸として寅彦と高知の風土を織り上げてゆく。そして第三部「沿岸船物語」で著者の中にある風土を描き出すことにより寅彦の風土を浮かび上がらせるという構成である。

前二作が共に高知新聞の連載を中心とした高知の風土を織り上げてゆく。そして、上梓したものの対して、本作はそれぞれ独立したもので構成されている。しっかりととした取材に裏打ちされた力強い文章であることはもちろんが、本作を読み終えて思うことは、『寺田寅彦』と『高知の風土』に対する著者の深い愛情である。それは、『評める』ことだけでなく、『叱る』ことも含まれている。叱ることが下手な大人が増えてきた現代において久しぶりに『叱られた』かは読む人それぞれによって違つだらうが、著者は深い愛情によつて叱つて

県内同人誌紹介



『高知歌人』

昭和22年、戦後の荒廃した中から影山聖一、安部忠三らによって「高知歌人クラブ」として発足し、本年9月で創刊56周年を迎える。昭和24年9月「高知歌人」と改め、昭和30年4月83号から田所妙子が編集兼発行人となり、毎日、読売新聞歌壇の選手、高知文学学校、高知市役所短歌講座の講師として多くの歌人を育成し、県文化賞を受賞。平成6年田所妙子が急逝、後継者の龜井美和子は、高知歌人叢書第70編として刊行するが病を得て夭逝。岡田修に引き継がれ、平成12年からは、西岡瑞穂子が編集・发行人を務める。草創期から流派を超えて、個性尊重、伝統短歌を基本に写実とロマン、個性と叙事性豊かに21世紀を展望する月刊歌誌。県内外の会員が広く発表の場を持つ。高校生・大学生の入会も歓迎。

(西岡瑞穂子)

電話 088-824-3722
発行所 高知市小津町5-2
ダイアパレス208号西岡編集・发行人 西岡瑞穂子
高知歌人社

「寅彦と宇吉郎の絵画展」を終えて



5月19日まで、文学館展示室にて「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画について、その殆どを当館が所蔵していることもあり、これまでに何度も紹介されていいる。しかし、

寅彦と宇吉郎の絵画展は、その殆どを当館が所蔵していることもあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

4月8日～4月19日までは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度か紹介されていいる。しかし、寅彦を生涯の師と仰ぎ、彼から多くの影響を受けた物理学者中谷宇吉郎の絵画は、宇吉郎の次女中谷不二子氏や中谷宇吉郎雪の科学館のみな様にご協力いただき、当地ではじめて紹介することができた。初日より熱心なファンが会場をおとず

る。しかし、寅彦と宇吉郎の絵画には、流れがある。油彩画、水彩画、墨絵・絵画の前に立つて、二人の姿とともに、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることもあり、これまでに何度も紹介されていいる。しかし、寅彦と宇吉郎の絵画には、流れがある。油彩画、水彩画、墨絵・絵画の前に立つて、二人の姿とともに、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

4月28日（日）には、「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」が描かれた絵の素晴らしさはもちろん、絵画を通して、当時の彼らの様子が浮き彫りにされた。そんな展覧会となつた。今回、二人の物理学者の貴重な絵画をご紹介できる機会を得たことを感謝申し上げる。

4月28日（日）には、「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」が描かれた絵の素晴らしさはもちろん、絵画を通して、当時の彼らの様子が浮き彫りにされた。そんな展覧会となつた。今回、二人の物理学者の貴重な絵画をご紹介できる機会を得たことを感謝申し上げる。

4月28日（日）には、「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」が描かれた絵の素晴らしさはもちろん、絵画を通して、当時の彼らの様子が浮き彫りにされた。そんな展覧会となつた。今回、二人の物理学者の貴重な絵画をご紹介できる機会を得たことを感謝申し上げる。

4月28日（日）には、「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」が描かれた絵の素晴らしさはもちろん、絵画を通して、当時の彼らの様子が浮き彫りにされた。そんな展覧会となつた。今回、二人の物理学者の貴重な絵画をご紹介できる機会を得たことを感謝申し上げる。

4月28日（日）には、「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」が描かれた絵の素晴らしさはもちろん、絵画を通して、当時の彼らの様子が浮き彫りにされた。そんな展覧会となつた。今回、二人の物理学者の貴重な絵画をご紹介できる機会を得たことを感謝申し上げる。



4月28日（日）記念講演会
「物理学者・寺田寅彦と中谷宇吉郎
～絵画展によせて」
講師 上田壽氏（高知医科大学名誉教授）



5月18日 第26回朗読の会
「寅彦と宇吉郎」

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

5月10日（金）の高知新聞朝刊には、前半に「寅彦と宇吉郎の絵画展」が開催された。寺田寅彦の絵画を鑑賞され、その背景をも浮かびあがつてくる。そして、これらは、その殆どを当館が所蔵していることがあり、これまでに何度も紹介されていいる姿が、とても印象的だった。

北見志保子

志保子



松田川（歌は歌碑のまま）

やまかはよ
のよあた

たかきふるさとよ

なかむ

ながゝりし

かな



「キタミシホコ？」知つちゅう、知つちゅう

う、何回かここへ帰ったようじやが。けん
ど、まあ、浮氣したおんなは、ちつと帰り
にくかったろうのう。元の亭主は、たしか
あつちの方の人と聞いちゅうが……」と男

は北見志保子（明治十八年、高知県幡多郡

宿毛村、現宿毛市土居下）の最初の夫橋田

東声の出身地、中村市有岡の方むいて、笑

いながら、アゴをしゃくった。有岡はここ

から東方へわざか十キロ。

志保子の生家跡の写真を撮るべくうろ
ろしていたこちらに、男は興味津々の面持
ちで付きまつた。それにしても、「浮気女」
とはいきなりどぎつい言葉を吐いてくれた
ものだ。男は退職して三年になるという元
国家公務員。志保子の歌は、一つも知らな
いと言った。師であり夫である東声から浜忠次郎（の
ち千代田生命社長）に心を移したのは大正
九年、志保子三十五歳の頃。忠次郎は十二
歳年下の容姿満点の華の慶応ボーテであつ
た。東声が志保子の妹に手を出したことが
原因になつたようだが、なにぶん、志保子
の天然の恋情の容量が、地味な学者型歌人
東声というコップに收まりきれなかつたよ
うなのだ。一向に離れそうになつたひとりの野
次馬に、ふと訊いてみたくなつた。「志保子
みたいに、人を死ぬほど好きになつたこと
はありますか？」良識に護られて過不足な
い日々を至上としたであろうこの元国家公
務員氏には、志保子の恋など理解困難な出
来事だろう。愛とか恋とかありふれた事な
がら、当事者の身に立てば、なまなましい
こと。後世の赤の他人が簡単に回収できな
い謎めいたものがいっぱい詰まつていると
いうものだ。たとえば、へ来るひとを幾日待ちけむ門の外に今宵ひ
とり我が立ちつくす▽あはむ日をおもひ
たへつつここに来てわが目にいたき野苺の
花▽新月のほの明るきに面ふせて語りし人の忘られなくに▽『月光』（昭三）所収。
忠次郎を恋した歌だが、三十五歳にも
なつた女の歌とは到底思えないではないか。
少女のような胸の高まり。恋の不思議な力ともいべきもので、この純真さがいつも、
志保子の文学的創造の「現場」、基本的メロ
ディーであったということが、志保子のユ
ニーケさであろう。一方東声は、へくるしさに夜なに起き
てのむ酒は醉ひて眠らぬ黎明の遠さ▽と嘆
き、へこの心とほらぬものか妹と背のちぎ
りあさしとわれは思はぬに▽と、何とも納
得いかない様子、がへかりそめにちぎりし
ことと思はねど去りゆく心つなぐすべなし
▽とついに觀念する。一敗地にまみれた東
声の身も世もあらぬコキュの嘆きに、男で
あるこちら、妙に心が傾くが、しかし、故
郷を針のむしろにし、歌壇から不利な扱い
を受けようとも、以後忠次郎を愛しつづけ、
短歌精進を貰いた志保子に、人を愛するこ
とのすごみを身をもつて示されたようで、
こちらタジタジとなつた。△開かれし永劫の門を入らむとし植ゑし
紺桃をふと思ひたり▽朝庭に下りてみた
れば紺桃の花は乱れを見せて過ぎゆくとこ
の世界から宗教的実存の深みに至つたこ
んな歌を死の寸前に呈示されればなおさら
のこと。掲歌は昭和二十八年、宿毛小学校校庭の
歌碑に刻まれたもの。
※昭和十年、「平城山」（人恋ふはかなしき
ものと平城山にもとほりきつづ堪へがたか
りき▽古へもつまに恋ひつづ越へしとふ
平城山のみちに涙おとしぬ▽）が平井康三
郎により作曲され、大ヒットした。

（国則三雄志）

見どころ●宿毛歴史館●咸陽島公園●延

交 光寺

通II土佐くろしお鉄道宿毛行き特急

資料受贈報告

（平成十四年三月～五月）

敬称略

▼常石麗子・「(句集)麗子 常石麗
子 土佐俱楽部社」▼水田佳・「(詩
集)春ばかり 水田佳著刊」▼零余子の会・「(句集)零余子第2集 永
野美智子編 零余子の会」▼高橋
橋正・「西園寺公望と明治の女たち 高
橋正 不出版」▼市原麟一郎・「土
佐の神仏めぐり④ 土佐の神仏紀行
市原麟一郎 リーブル出版」▼森
田紘夫・「現代語訳 茅花物語 横
山青娥・横山寿賀子 塔影書房」他▼溝淵匠・「佐久間淑子・田岡典夫
会編刊」▼溝淵匠・「土佐の文学碑めぐり
色紙「山茶花は梢にかそけし⋮」他▼森洋彦・「巨木を
見にいこう 嶺北巨木伝説実行委員
会編刊」▼大原三三男・「巨木を正・「西園寺公望と明治の女たち 高
橋正 不出版」▼市原麟一郎 リーブル出版」▼森
田紘夫・「現代語訳 茅花物語 横
山青娥・横山寿賀子 塔影書房」他▼妻鳥季男・「青風の笛 森三千加
リープル出版」▼横田晴光・「高丘
王航海記 濑澤龍彦 文藝春秋」他森三千加・「青風の笛 森三千加
十八号 喜代吉榮徳 海王舎」他▼高知県東京事務所・「(油彩画)杉の大
杉 高橋虎之助 一九四三年」：高橋虎之助（一八九〇～一九八
四）は洋画家。明治二十三年七月四
日、彌助・茂の長男として高岡郡日
下村（日高村）に生まれました。県
立農林学校（高知農業高校）卒業後
上京し、太平洋画会研究所に入り石
川寅治、中村不折らの指導を受けま
す。大正元（一九一二）年太平洋画
会展に入選し、続いて二年大正博覽
会展にも入選します。翌年高知市で

◆◆◆ 文学館 日誌 2002年3月～5月 ◆◆◆



3/2 講演会「近代美術の先覚者 岩村透」

- ◆ 1日 横山青娥関係者（野田照子氏外）
3名来館。◆ 2日 特別展記念講演会「近代美術の先覚者 岩村透」高知・東京・パリ
講師・田辺徹氏（美術史家、前京都成安造形大学長）。午後2時～午後3時30分まで。
文学館ホール。参加者30名。／朝倉彫塑館
遠縁 学芸員 村山氏ご来館。／岩村透・浜本浩の
鈴木蕙様ご夫妻来館。◆ 3日 紙芝
- ◆ 4日 横山青娥関係者（野田照子氏外）
3名来館。◆ 5日 特別展記念講演会「近代美術の先覚者 岩村透」高知・東京・パリ
講師・田辺徹氏（美術史家、前京都成安造形大学長）。午後2時～午後3時30分まで。
文学館ホール。参加者30名。／朝倉彫塑館
遠縁 学芸員 村山氏ご来館。／岩村透・浜本浩の
鈴木蕙様ご夫妻来館。◆ 6日 紙芝



3/30 「ハリ憧憬」展 展示風景

- ◆ 7日 大阪大文学研究科文化表現論専攻
朴銀姫氏が倉橋由美子の草稿閲覧。◆ 8日 映画上映会「にじりえ」（1953年）
午前11時～（第1回上映）。午後1時20分～
「夫・今井正」についてのお話・今井ツヤ
氏。午後2時～（第2回上映）。文学館ホー
ル。参加者約150名。◆ 9日 第4回文学カレッジ
(第5回目)「科学随筆を探る」寺田寅彦の
作品から」講師・上田壽氏（高知大学名誉
教授）。午後1時30分～3時まで。文学館
ホール。◆ 10日 映画会「巴里の屋根の下」
午後2時～午後3時30分。文学館ホール。
参加者40名。／和光大学教授 塩崎文雄氏
ご来觀。◆ 11日 文学館運営協議会。午後
2時～／公文徹氏・西森氏ご来館。◆ 12日
文学館運営協議会。午後
1時30分～3時まで。文学館
ホール。◆ 13日 映画会「巴里の屋根の下」
午後2時～午後3時30分。文学館ホール。
参加者40名。／和光大学教授 塩崎文雄氏
ご来觀。◆ 14日 文学館運営協議会。午後
2時～／公文徹氏・西森氏ご来館。◆ 15日
文学館運営協議会。午後
1時30分～3時まで。文学館
ホール。◆ 16日 映画会「巴里の屋根の下」
午後2時～午後3時30分。文学館ホール。
参加者40名。／和光大学教授 塩崎文雄氏
ご来觀。◆ 17日 文学館運営協議会。午後
2時～／公文徹氏・西森氏ご来館。◆ 18日
文学館運営協議会。午後
1時30分～3時まで。文学館
ホール。◆ 19日 映画会「巴里の屋根の下」
午後2時～午後3時30分。文学館ホール。



5/11

専門講座「地球を科学する寺田寅彦」



高橋虎之助 「杉の大杉」

- ◆ 20日 紙芝居研究会「日本人文学者のパリ体験～岩村透を中心に」講師・今橋映子氏
（本展監修・東京大学助教授）。文学館ホー
ル。参加者35名。／稲垣様（都市出版）ご
来館。◆ 21日 紙芝居研究会（インド紙芝
居）午後1時30分～午後3時まで。参加者
約30名。／愛媛県重信町文化協会理事36名
ご来館。◆ 22日 「小夏の映画会」6名様ご
来館。◆ 23日 24回朗読の会「パリ憧憬」
いごつそうパリをゆく～午後2時～午後
4時まで。文学館ホール。参加者45名。◆ 24
日 映画上映会「にじりえ」（1953年）
午前11時～（第1回上映）。午後1時20分～
「夫・今井正」についてのお話・今井ツヤ
氏。午後2時～（第2回上映）。文学館ホー
ル。参加者約150名。◆ 25日 紙芝居研究会午
後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。
参加者約50名。◆ 26日 紙芝居研究会午
後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。
参加者約50名。◆ 27日 紙芝居研究会午
後1時30分～午後3時まで。文学館ホール。

3月

4月

第一回個展を開催し、四年には太平洋画会員となります。五年には太平洋画会の出品作「漁村の夏」が官内省御用となります。第十二回文展会で「春日の杜」が入選するなど着実に地歩を固めています。八年大阪

- 来観。◆ 23日 24回朗読の会「パリ憧憬」
いごつそうパリをゆく～午後2時～午後
4時まで。文学館ホール。参加者45名。◆ 24
日 演会「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」絵
画展に寄せて～講師・上田壽氏（高知大
学名誉教授）。午後2時～午後3時30分ま
で。文学館ホール。参加者20名。

- ◆ 25日 3時まで。文学館ホール。◆ 26日 記念講
演会「物理学者寺田寅彦と中谷宇吉郎」絵
画展に寄せて～講師・上田壽氏（高知大
学名誉教授）。午後2時～午後3時30分ま
で。文学館ホール。参加者45名。◆ 27
日 演会「パリ憧憬」日本人文学者のヘーフラン
スヴァ体験～展終了。／ミニ企画「横山青
娥展」終了。

- ◆ 28日 3時まで。文学館ホール。◆ 29日 24回朗
読の会「パリ憧憬」が入選、第十二回文展会
で「春日の杜」が入選するなど着実に地歩を
開拓していきます。八年大阪白木屋で開催した個展で意外の人気を博し、これを基に東京・高知で個展を開き渡欧のための資金を得ます。十年第三回帝展で「提琴」が入選。十二年ヨーロッパ留学し、パリ、
グランショミエーなどで学びサロン・ドウトントヌに「ジャルダン」が入選するなど活躍、滞欧二年で帰国します。十四年太平洋画会の評議員、常務委員、展覧会委員となり会員の運営に携わります。昭和四（一九二九）年に太平洋美術学校教授となりその後帝展での入選を重ねていきます。昭和二十年太平洋戦争で罹災した太平洋美術学校の再建に尽力、二十二年東京西日暮里に舍屋を新築します。昭和二十年太平洋美術会と改め会長とし会名を太平洋美術会と改め会長となります。九十歳を超えて裸婦の大作に挑むなど創作意欲は晩年まで衰えませんでした。昭和五十九年一月、胃癌により死去。九十三歳。遺作一〇三点は、本人の遺志により同年七月高知県に寄贈されました。「大杉」の絵はこの度収蔵されたものを作りました。大杉の絵はこの度収蔵されたものを含め少なくとも四点の制作が確認できます。

高知県立文学館カレンダー

2002年

7～9月

7月—July

8月—August

9月—September

講座等

催しもの

企画展示室



寺田寅彦になろう！ 夏休み子ども教室

■内容について

- ① 7月24日(水)、25日(木)…寺田寅彦入門
★先生：恒石直和氏(友の会会長)
 - ② 7月31日(水)、8月1日(木)…お絵かき教室(自画像を描く)
★先生：織田信生氏(絵本作家)
 - ③ 8月28日(水)…実験(日本海拡大、対流)
★先生：鈴木堯士氏(高知大学名誉教授)
 - ④ 8月29日(木)…野外遠足(バスツアー)
 - 【昼間】住吉海岸で大陸移動がわかる岩石を見学
 - 【夜】芸西天文学習館で、空を知って“宇宙見物”してみよう
- ★先生：鈴木堯士氏(昼間の部・見学)、関 勉氏(夜の部・天体観測)
 ※この日のみ保護者同伴
 ★定員35名 <参加料>2000円 <対象>小学校4年生～6年生

- 日本文学原作の映画上映会・第3弾！(監督／谷口千吉)
『暁の脱走』(1950年・新東宝) 原作／田村泰次郎「春婦伝」
 出演／池部 良、山口淑子
 <日 時>8月24日(土)
 ●第1回上映…10時～
 ●解説／猪野 瞩(日本社会文学会評議員)…12時10分～12時50分
 ●第2回上映…13時～
 <場 所>文学館1階ホール <参加費>500円 <定 員>各100名
 【主催】小夏の映画会・高知県立文学館

●開館5周年記念特別展

「棟方志功展」

<前 期>6月28日(金)～7月17日(水)
 <後 期>7月18日(木)～8月4日(日)
 <場 所>文学館2階企画展示室
 <料 金>一般550円、高校生以下無料
 (前期展示の観覧券の半券を提示していただくと、
 後期展示の観覧料が440円になります。)

関連行事 ※文学館1階ホールにて

- ◆記念講演会(定員150名・当日先着順)
 講師：吉村淑甫氏(前県立歴史民俗資料館館長)
 鍵岡正謹氏(県立美術館館長)
 <日 時>7月6日(土) 13時半～16時
- ◆ビデオ上映会(定員50名・当日先着順)
 「彫る・棟方志功の世界」(1975年・41分)
 <日 時>期間中毎日曜日(但し8/4は除く)
 各日11時～、14時～
 ※但し入場の際に「棟方志功展」観覧券の半券をお見せ下さい。

【休館日】7月—1, 8, 15, 22, 29日 8月—5, 12, 19, 26日 9月—2, 9, 17, 24, 30日

次回企画展

寺田寅彦展

当館所蔵資料を中心に、寅彦の生涯、とくに土佐での寅彦についてご紹介します。

★11月3日(日)～1月5日(日)

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
 年末年始(12月26日～1月1日)
- 観覧料 一般350円
 特別企画展のあるときは、料金が変わります。(一般550円)
 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
- 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1～20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
<http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/>
 〒780-0850